



県事協だより

NO.64

2011年2月14日

発行：鹿児島県公立小中学校事務職員協議会

編集：県事協理事会

うさぎにあやかり、躍動の一年を願って

会長 早崎当和

新しい年も1ヶ月が過ぎてしまいました。遅くなりましたが、昨一年間、県事協をこれまで以上にともに培っていただいた県内の学校事務職員のみなさまに心から新年のご挨拶を申し上げます。また県教委各課及び福利厚生団体の皆さまには、平素から県事協の活動に対し多大なご理解、ご協力をいただき心より深く感謝申し上げます。

さて鹿児島県の学校事務職員にとり、新たな形での仕事のありよう(=学校事務支援室)が始まっています。薩摩川内市と東串良町において、昨年4月から具体的なとりくみが進められています。その一端が、1月28日の薩摩川内市における「共同実施連絡協議会」における活動報告です。この実践報告は、鹿児島らしい「共同実施」の姿を示唆するものでした。それは地域に根ざし、学校の主人公である子どもたちの学びと育ちの場を、学校事務という仕事を通していかに関わっていくかということに念頭に置いていることからそのようにいえます。これから県下各地で、この学校事務支援室が設置されていくこととなります。私たちは、学校事務支援室において近隣校の複数の事務職員(基本的には中学校区を単位とした)によって、正確で適正な業務を第一義に進めることとなります。そしてこのことが関係各機関にとっても有意義なものとならなくてはなりません。

また業務を行う執務室は、楽しいものでなくてはならないと思います。しかし事務作業場的な執務室にはならないと考えます。あくまでも子どもに深く寄り添う学校事務の実践を執り行っていかなければなりません。このことは口で言うは優しいが、なかなか難しいことです。だが私たちの仕事は誰のために、何の目的でこの職があるのか?ということに常に心に据えて進めていけば、何をすればいいかの答が見えてきます。これまでの学校事務職員の歩みがそうであったように、自らの仕事を通して現場からの実践で、これからの鹿児島県における学校事務の新たな歴史を刻んでいかなければなりません。

そうした現場での実践を支えるネットワークとしての役割を担っていくように、県事協発足の理念である「県下の学校事務職員が等しく情報を共有・享受し、広域的に連携し集う場としての県事協」を肝に銘じて運営を心がけたいと、心新たにしています。飛躍の「卯年」にあたり、県内全ての学校事務職員のみなさんと、ともに歩む県事協であり続けることを願いながらごあいさついたします。



写真は1月28日開催の薩摩川内市における「共同実施連絡協議会」の様子。詳細は次号で。

活動経過及び予定



- ★9月16日 県事協だよりNO.61 発行、第5回理事会、第2回常任委員会
- ★10月1日 HP更新32
- ★10月14日(木) 県教委へ諸手当認定マニュアル等の点検依頼
- ★10月26日(火) 第6回理事会
- ★11月12日(金) 県教委へ諸手当認定マニュアル等の点検結果を受領
- ★11月15日(月) 県事協だよりNO.62 発行
- ★11月22日(月) 第7回理事会、第3回評議員会 (鹿児島市中央公民館)
- ★11月25日(木) HP更新33
- ★12月14日(火) 第8回理事会、第3回常任委員会 (県教職員互助組合会館)
- ★12月20日(月) 県事協だよりNO.63 発行
- ★12月22日(水) 県教委へ諸手当認定マニュアル等の点検依頼(2回目)
- ★2月8日(火) 第9回理事会(県教職員互助組合会館)
- ☆3月9日(水) 理事会、第4回評議員会、第3回常任委員会



HPの更新は県事協だよりが届く頃には何とか・・・ 検索は「鹿児島県教職員共助会」で。リンクで「県事協」とありますのでそこから入っていただくとありがたいです!



鹿児島市における共同実施実現へ向けての取組の一例を先日行われた市全体の研修会の内容から紹介する。平成23年1月12日(水)鹿児島市学校事務職員研究協議会(会員数:鹿児島市学校事務研究会64名 鹿児島市学校事務職員会 45名 その他 1名)が開催され、鹿児島市における共同実施のあり方についての活発な意見交換がなされた。平成21年度に発足した共同実施検討委員会(鹿児島市の両会から選出した委員12名)からは、鹿児島市における共同実施の目的をあくまでも県の要綱のとおりとし、「より一層の事務の適正化や効率化を進めることにより、学校運営への積極的な支援や教員の子どもの向き合う時間の確保を図るための取組等を実践し、学校教育の充実に資する。」こととした。また、共同実施を進める上での重点を「学校運営、経営の中核を担う事務職員をめざす」としたこと。さらに、「支援室」という組織の中で「相互支援」を行いながら、人材育成や組織としての課題解決能力の向上をはかり、各学校の学校事務機能を高めることが重要であることから、共同実施を進める上での理念を「学校事務の相互支援」としたことなどが報告された。

また、支援室で行う具体的業務の進め方については、

【ステップ1】事務処理の適正化・効率化から①県費、市費における事務処理の適正化・効率化②相互支援を図ることにより事務職員間の連携と資質向上を目指す。

【ステップ2】教員の子どもの向き合う時間の確保から①標準的職務への取組②教育活動への新たな支援としたことを確認した。

討議をとおして、鹿児島市でのグループ分け(19)が、大きいところで児童生徒数が5000人以上になるなど、共同実施が更なる過剰労働になるかもしれないという不安の声が寄せられた一方で、この共同実施をきっかけに新たな事務職員制度確立を展望しようとする若い世代の期待が感じとられた。また、これからの時代を担う若い仲間の成長を頼もしく感じた一日でもあった。経験豊富なベテランがリーダーシップを発揮しながら、若き世代へバトンを繋いでいく時であろう。今後も鹿児島市学校事務研究会では、「焦らず 急がず 失わず(相互支援の理念を)」鹿児島らしい共同実施のあり方を探って行きたい。

笑み残し はく息白く 霜の道行く

「趣味のはなし、など」

1979年頃からラジオのNHK-FMで「サウンド・ストリート」という番組を毎週水曜、聴いていた。DJは音楽評論家の渋谷陽一。当時はQueenの全盛期。最近では生前のフレディ・マーキュリーがカップヌードルのCMで見られる。Queenは「We are the champion」や「We will rock you」が知られているが僕は「Play the game」とか「愛と言う名の欲望」が入ったアルバムTHE GAMEがリアルタイムで聴いたためだろう、いいと思う。渋谷氏がイチ押し「天国への階段」で有名なレッド・ツェッペリンはジョン・ボンナムが亡くなって解散した。中でもアルバム「プレゼンス」は秀逸である。1曲目「アキレス最後の闘い」を聴くととても凶暴な気持ちになるので車では聴かないようにしている(笑)。ボンナムの代わりになるドラマーはいない。THE POLICEも素晴らしかった。アルバム「ゼニヤッタ・モン・タッタ」は当時の言葉で言う「ニューウェーブ」の最先端だった。5作目のアルバム「SYNCHRONICITY」は期待のあまり予約で購入した。素晴らしかった、がその後解散。ボーカルのスティングは今でも大活躍している。僕の中でロックは、やはりジョン・レノンだ。ビートルズは1970年に解散しているのだから、全くの追体験である。中2頃「ヘルプ」を教室で聴いたときはとても新鮮だった。先生がいなくて勝手に友達でテープを再生したのがビートルズとの出会い。ホント、音楽の授業は死ぬほど嫌だったのに。それからはビートルズを中心にQueen、ポリス、クラッシュ、ツェッペリンなど聴きまくった。野球部には興味が無くなり練習もサボった。(なのに、約10年後には中学校野球部監督をすることになるのだから人生はおもしろい。)ジョン・レノンが死んだ時期は最悪。1980年12月。高校入試前。成績は下がる一方だった。中学から大学までためにためた録音テープはエアチェックを含めて今でも300本くらいある。CDはまだ、当時一般的ではなかった。大学時代から「ロッキング・オン」という音楽雑誌を20年くらいずっと読んでいた。この雑誌を作ったのが渋谷だ。彼の考えた雑誌作りの方法論は、素人からの投稿記事を募集、編集していくという当時では画期的なアイデアだった。コンセプトは「ロックを文学的表現で語る」とでも言ったらよいだろうか。とにかく文章が難しい。しかし慣れない言葉、わからない言葉を辞書で調べ読み、音楽を聴きながら併せて読んでいくと次第にハマっていった。今考えると読解力をつけることになったのだと思う。読むのを止めてしまった理由は音に追いつくことができなくなったからだ。ニューオーダーがはやっていた頃はホントおもしろかった。オアシスも聴いたが、最後に聴いた僕にとってのロックはレディオ・ヘッドだろう。いつかまたロックを趣味として、集中的に聴くことになるかはわからない。

2011年1月中旬に県内現職事務職員が3人も亡くなった。偶然にしても・・・個人的なことなのか学校現場の問題なのか、現職死亡の事務処理は大変だと聞き、そんな事務処理には関わりたくない。経験したくも無い。しかし、今後はそういったことも「支援室」の役割であろう。今、「共同実施」「支援室」の関係ばかりが事務職員界では話題の中心である。だからというわけでもないが今回はあえてマニュアルに自分の趣味や思い出を書いてみた。なかなか他の理事も忙しいので編集する自分がマスを埋めるしかないのだ。スペースの関係でほとんど端折って書いた。伝わらないかもしれない。それどころか、これまで読んだ人からは茶化されたり、反応がなかったり。批判的なのだろうかと思う。HPに掲載している大事協だよりのほうが相当充実していると思う。来年度は1回発行する毎に2地区には割り当てたいと思う。他の理事にも書いてもらう。それで最近、僕の原動力は観念的な怒りだ。県事協が正しく理解されていないことへの怒りである。こちらがマニュアルを作ればますます依存心が増幅され、自分で考えることをしない傾向が顕著である。もし、反論があれば堂々と投稿していただき、論議することが大切だと思う。断っておくがこれは愚痴ではない。愚痴というのは「言ってもどうしようもないこと」と辞書にある。前向きに今後の県事協のあり方を考えているのだ。次号には県教委から指摘の多い年度末初めのことなどを載せたいと思う。最後に、ジョン・レノンが生前言っていた。「皺くちゃになるまで生き抜け」と。そうありたいと思う。

県事協理事 羽島中学校 松元裕之